

25. 治療中に頭蓋底に腫瘍性病変を認めた Ph1 陽性急性骨髄性白血病の1症例

武田晋一郎, 松浦康弘, 青墳信之
脇田 久 (成田赤十字)

症例は74歳女性。住民検診にて白血球13万を指摘され、骨髄穿刺の結果 Ph1 陽性急性骨髄性白血病と診断。IDA, Ara-C による寛解導入療法を行うも寛解を得られず、中等量 Ara-C+MIT にて再寛解導入療法を施行した。再寛解導入療法開始2週頃より、発熱と炎症反応上昇に続いて中枢神経障害が出現し、MRI 上頭蓋底に腫瘍性病変を認めた。病理解剖の結果、同部位に真菌によると考えられる壊死を認めた

26. 当院で経験した急性前骨髄球性白血病 (APL) 11例の検討

門平忠之, 小出尚史, 前田裕幸
松浦康弘, 青墳信之, 脇田 久
(成田赤十字)

平成6年5月より平成14年12月までに当院で経験した APL11例 (移管1例, 加療中2例) につき検討した。年齢33-69歳 (中央値56歳), 男性7名, 女性4名。G-染色法による染色体は, 7例 t (15;17), 4例正常核型。2例は M3variant で非典型的な白血球表面抗原 (CD2, CD56) を発現。全例が DIC を合併。ベサノイドを含む治療で全例寛解し, 3例に再発を認めた (再寛解1例, 骨髄移植1例, 死亡1例)。当院の APL について検討し, 考察を加えた。

27. 肺炎後に髄膜炎を発症し診断及び治療に難渋したコクシジオイデス感染症の1例

曾根崎桐子, 大石嘉則, 葛西正明
古川雅章, 杉本豊彦, 杉山隆夫
末石 真 (国療下志津)
渡辺励子, 端迫 清
(同・呼吸器内科)
亀井克彦
(千大・真菌医学研究センター)
片山 薫, 中田美保
(成田赤十字・神経内科)

症例は米国在住37歳日本人男性。平成14年4月上旬、肺炎と診断された。4月末、髄膜炎となり他院に入院したが症状の改善が見られず、当院に転院となった。コクシジオイデス髄膜炎および結核性髄膜炎が疑われ、加療したが奏効しなかった。6月、成田赤十字病院神経内科に転院となり、コクシジオイデス髄膜炎の確定診断に至った。同疾患は米国西南部の風土病であるが、

死亡例も少なくなく重要な輸入感染症であるため報告する。

28. ステロイドパルス療法が奏効した成人発症麻疹脳炎の1例

徳政直起, 石塚俊治, 後藤啓五
畠山一樹, 和泉紀彦, 窪田賢輔
齋藤秀一, 並木隆雄, 平井愛山
(県立東金)

麻疹の罹患率はワクチンの開発・普及とともに減少しているが、未だに数年毎に流行がみられる。麻疹脳炎は麻疹患者の千から二十人に一人の頻度で発症するといわれ、健康成人での発症は稀である。麻疹による脳炎は肺炎とともに麻疹の二大死因の一つであり、注意を要する合併症であると考えられるが有効な治療法は確立されていない。我々は麻疹脳炎の成人男性でステロイドパルス療法が奏効した症例を経験したので報告する。

29. 救命しえた G 群溶血性連鎖球菌による劇症型感染症の1例

阿部大二郎, 遠藤 溪, 佐野英樹
川野英一郎, 伴 俊明
(国保国吉)

76歳女性。主訴は両下肢痛。来院時、血圧 62/33mm Hg, 脈拍100回/分、体温35.9℃、両下肢は腫脹・発赤していた。臨床症状より劇症型溶連菌感染症と考え、全身管理ならびに抗生剤、γグロブリン製剤投与を開始。数日の経過で両下肢は紫斑→水疱形成→壊死性筋膜炎様となり、DIC、急性腎不全、呼吸不全を併発。デブリードマンは施行せずに全身状態の改善を認めた。入院時血液培養より G 群溶連菌が検出された。

30. 血清可溶性 IL-2 レセプターが高値だった結核の症例

若新英史, 熊野浩太郎, 小林淳二
村野俊一 (下都賀総合)

症例は87歳男性。肺炎の加療行っていたが軽快せず、気管支鏡にて肺結核の診断となる。本症例で血清可溶性 IL-2 レセプター高値だった。この患者について文献的考察加える。また結核の治療開始後10日目に死亡した。

病理解剖施行したのでその結果も合わせて報告する。